

はじめに

この小冊子は、最近、頻繁に出版されている「幸福になるための法則本」のひとつです。法則の原案は、ご縁があつてお世話になつた方々から伺つた貴重なものです。そして、本編は、それらの法則から導き出された、新たな法則を「実践、検証」された方々の「実体験をもとに」創作された物語です。

私自身、これらの法則が日常的に「参考とするに十分値するもの」だと感じています。しかし、このタイプの法則に対する評価は、どんなに気をつけても、主観的な評価に陥りがちなので、検証が難しいと考えているのも事実なのです。

それでも、読み進めていただけたら、ご理解いただけると思うのですが、体験的に「ああ、知ってる・・・」とか「ああ、分かる・・・」という法則が書かれているはずですよ。

ところで、現在、出版されている、多くの「法則本」に対して、違和感を感じている方も少なくないと思います。その理由を考えてみますと、法則本のほとんどが、本を出版できるような立場の方や、出世することに肯定的で、元気で、前向きな方のために、書かれているものであるという可能性があげられます。つまり、一般的ではないと思うのです。しかし、この小冊子では「この法則には気付いてた：：」「あ：：やっぱりこれって法則なんだ：：」「法則にするとこんな言葉になるんだ：：」という、あなた自身の、普段はあまり意識化されていない法則が、見い出されることになると思います。

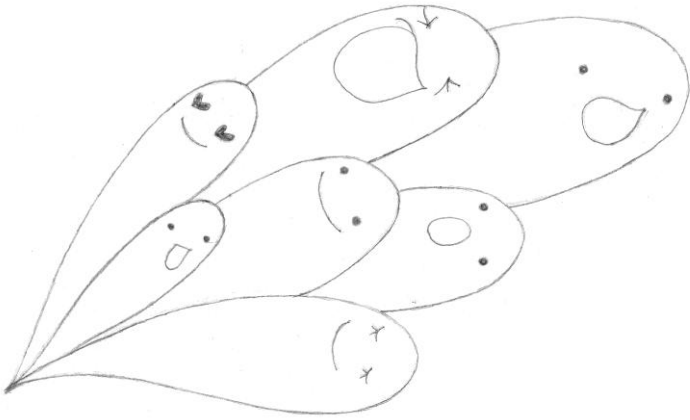
ちなみに、物語中の「ザ・ルーツ」という法則本（現在、編集中なのですが：：）のタイトルは、「すべての人の心の深いところある、最も根本的な法則を集めたものを作りたい」という、祈りにも似た願いから名付けられたものです。

この小冊子が、「あなた自身の法則を見出し、意識化して、使いこなすためにお役に立つ」とともに、今まで気が付くことのなかった「あなた自身の根っこの法則を、一つでも多く発見するきっかけ」となることが、著者としての最高の喜びであり幸福です。そして、私

自身お世話になった、多くの方々に対する、なによりの「恩返し」になることを信じています。

最後に：あなたが、あなた自身の見出しした法則により、ゆらぐことのない、最高の、絶対的な幸福に気付かれることを、遠くから祈っています。

江見 佐智恵



日曜日の夜。いつものように朝七時にセットされた目覚し時計を憂鬱な気分で眺めながら、私は絶望的なため息をつく。「明日から、また一週間仕事かあ。もうやだ、めんどくさいよ
お……」

私の名前は平岡優子。六本木の商社ビルで働いている、ごくごくフツートのOLだ。六本木なんて言うとなんかいいかもしれないが、そんなことは全然ない。

朝九時に始まる朝礼から、水色の制服を脱ぐ六時過ぎまで、ひたすらデータを打ち込んだり、コピーを取ったり、電話の応対に追われたり。華やかな街並みとはうって変わって、職場は戦場そのものだ。そうそう！お局さまの機嫌取りもしなくちゃだし。そんなこんなで、電車の窓に映る、疲れきった顔の自分に目を背けながら惰性で過ごす毎日なのだ。

「ああ毎日毎日、同じことの繰り返しで、三十路にして私、煮こごりになってしまっそう！」

そんな煮こごり地獄から私を救い出してくれるもの。それは「結婚」なんだと思うのだけ
ど。そんな私の願望とは裏腹に、恋愛も仕事と同じく訳のわからない状態、と言うのがひと
つの事実。

「大輔のヤツ、忙しい忙しいって自分からはろくにメールも電話もしてくんないんだか
ら！」

彼氏である大輔との付き合いは三年前から。自分で言うのも何だが、付き合いだした当初
はそれなりにラブラブで、教科書に出てくるような歴史的建造物から、最新のテーマパーク
まで、大輔は私をいろんな所に連れて行ってくれたものだった。しかし、近頃は放置プレイ
かとツツコミたくなるほど放ったらかしにされている。そんな訳で、日曜の夜にコールを入
れるのは、決まって私の役割なのだが。

「ねえねえ、聞いてよ。リサったら、またやってくれたのよ」

しかも、大輔は電話越しにあまり話をしてくれない。だから、いつも私が話題を振ること
になる。そこが私はいつも不服なのだが、大輔は意に介さない様子なのだ。

「明日っから、また会社だよ。仕事は忙しいわ、お局はムカつくわ、後輩のリサはミスば

っかりしてくれるしさあ。友達もみんな結婚しちやったし。あーあ、私も早く仕事辞めたいよ」

こちらとしては、頑張って話を盛り上げようとしているつもりなのだ。しかし、大輔は相変わらず面倒くさそうに、テキトーな相槌をうつだけ。

「大輔ってば、ねえ！ちゃんと聞いているの？」

そんな様子に、つい私は声を荒げてしまう。

「うるさいなあ。こっちは今日も休日出勤なんだよ。しかも徹夜明けで。疲れて帰ってきて、ようやく休めるって時に、こんなにグチグチ言われたんじゃたまらないな……」

携帯から聞こえる大輔の声は低く、イライラをかみ殺しているかのようだった。

「だいたい、こっちは先のこと考えて、一生懸命仕事してるんだ。ヌクヌク会社に腰かけてるお前とは違うんだよ」

大輔のあまりの物言いに、私もカチンと怒りのスイッチが入る。

「なによ、その言い方！私だっていろいろ苦労してるんだから。OLだからって、楽な仕事ばっかしてると思ってるわけ？大輔、人の気持ち考えたことあんの？いつも自分のことしか考えてないじゃない！」

「ふうん……」大輔は静かな声で、こう言った。

「その言葉、そっくりそのまま、お返しするよ。じゃあね」

続いて、プチツという音………切られた？

私は携帯を握りしめたまま、しばしボーゼンとしてしまう。最近、いつもこうなる。大輔は、私と会う時間を作ることはおろか、愚痴さえ言わせてくれないのだ。こんなパターンがお馴染みになってから、いったいどれぐらい経つだろう。

イライラが募る私は「仕事と私、どっちが大切なの？」なんて寒いセリフを口走ってしまいたい。今の私にとっては、仕事も恋もフラストレーションなのだ。



「おはようございます・・・」

一週間のはじめだと言うのに、誰かさんのせいで寝覚めは最悪。くたびれた制服に腕を通しながら、私はこつそりため息をついた。目の下のクマをメイクで隠せなかったことが、さらにローテンションに拍車をかける。デスクに向かおうとしたその時、

「平岡さん、ちよっと」

抑揚のない冷たい声が、背後から私を貫いた。「ウソ、私また何かした？」条件反射的に体中の細胞があわ立ってしまふ。

その声の主こそが、私の天敵「お局の江口」だった。

「平岡さん、また書類でミスがあったわよ。あなた、この仕事はじめて何年目？いつまで新人気分にいるつもりかしら」

ひええ、相変わらずイヤミな奴！と思いつつ私は反射的に頭を下げる。

「申し訳ありません！ すぐに直します」

「もう直しといたわよ」

冷やかな口調で江口はこう続けた。

「私もね、上司からやるべき仕事を山ほど任されてるの。あなたも、そろそろ学習したらどう？ 自分のことは自分で完璧にやってちょうだい。他人の手をわずらわせるなんて最低よ」
捨て台詞を吐き、去って行く江口の背中にペコペコしながら、私のムカつきは頂点に達する。

（えっらそうに！ なんでそこまで言われなきやなんないわけ？ ちよつと英語がしゃべれるらしいけど、こんな会社じゃ何の役にも立たないじゃないのよっ！）江口の英会話マニアぶりは、社内では有名なのだ。

一難去って、また一難。私は再びイライラの種に遭遇してしまう。

「ちよつとリサッ！ 何べん言ったら分かるのよっ！」

後輩のリサが、またもやミスをやらかしたのだった。「すみません」と、か細い声を出し、リサは所在なさげに立っている。悪い子ではないのだが、オドオドしていて鈍くさい。要領

の悪さや、失敗ばかりが目につく、出来の悪い後輩なのだ。

(よりによって、いつも江口の機嫌の悪いときに！ 最悪のタイミングなんだから)

その日はさらにトラブル続きで、江口にたつぷりとしぼられた私は、クタクタになって帰宅した。「ただいま」と我ながら覇気のない声で玄関のドアを開けると、視界に母親が飛び込んできた。

「おかえり、優子！ 聞いてよ、お父さんったらね！」

母は私の顔を見るなり、お馴染みのフレーズで畳みかけてくる。またか、と私はあからさまにウンザリした表情になってしまう。

「お父さんったら、また酔っ払ってどこかに泊まってきたみたいなの！ ほら、昨日帰って来なかったでしょ？ まったく、帰れなくなるほど飲まなきやいのにね。だいたい家のことは私にばかりさせて、自分はフラフラいい気なもんよね。おばあちゃんが生きてたときだって：：ちよつと、優子！ ちゃんと聞いているの？」

もちろん、聞いてない。というより耳にタコなのだ。母親の声を振り払うように、私はズンズン階段を上って自分の部屋のドアを乱暴に閉める。まったく、毎度毎度おなじ話ばかり、いい加減覚えたいわい！ と心の中で悪態をつく。

「ああ、家の中でくらい、のんびりしたい……」

お風呂上り、十年以上愛用している薄いグレーのスイエットに、くわえタバコと缶ビールという出で立ちで私はベランダに出た。そして、ひとり大きなため息をつく。飲み友達の影響ではじめたタバコの量も、近頃ずいぶん増えたなあ、と思う。煙をくゆらせながら、私は、未来を憂いて暗い気分になる。このまま、恋愛も上手くいかず、もちろん結婚も出来ず、上司と後輩に挟まれて、ストレスを感じたまま生きていかなきゃならないとしたら。

「ああ、どこかに、未来を変える魔法があったらいいのになあ」

私は、庭のハナミズギを見下ろしながら、そんな子供みたいなことを考えた。そして、いつものように空缶でタバコをもみ消し、疲れた身体を引きずるようにベッドに身を横たえた。

あとから思えば、その日が私の転機だった。何気なく「その本」を手にした、その日、その時が。だけど、当時の私は、凝り固まった頭のせいで、その本が発するメッセージをすぐには受け入れることが出来なかったのだ。

庭の新緑がきれいだな……と感じて、いつもより少しだけ軽い足取りで出勤した、その日。結局、いつものようにストレスでばんばんになって仕事を終えた私は、週末だというのに重い足取りで、久々に駅前の本屋に立ち寄った。どうせ、明日も大輔には会えないし、暇つぶしの雑誌でも買おうかな……消極的な気持ちで物色をはじめた。そこで、平積みになっていたある本が目についたのだった。

『ザ・ルーツ』

つやのない黒地のカバーに、金色のタイトルがきらきら光る、シンプルな本だった。私は、まるで吸い寄せられるかのように、半ば衝動的にその本を手にとっていた。

ルーツの法則

あなたが誰かにされたことは誰かにしたくなります。
あなたが誰かにしたことは誰かから返ってきます。

何気なく開いたページには、そんな言葉が書いてある。しかし、そうかな？ とすかさず私はツツコミを入れる。だって、そんなに世の中、平等にできてるわけではないし、それなら私ばかりが、こんな理不尽な目に遭うわけがないのだ。だいたい、これって仏教で言うところの『因果応報』ってやつでしょ、そんな説法はお寺のなかだけでやってりゃいいのよ。私は勝手に見切りをつけて、パターン！ と小気味よい音でその本を閉じると、その場を後にした。

「リサ！ ちょっと来なさいっ！」

月曜日の朝、デスクに座るなり私は声をはり上げた。先週末、リサに頼んでおいた書類に、
またもやミスがあったのだ。遅刻ギリギリで出勤してきたリサは、オドオドしながらも小走
りでやってきた。

「あんたねえ、あんたねえ、何度言ったら分かるわけ？」

肩で息をする私の剣幕に、リサが怯えているのはよく分かる。しかし、私はその後につづ
く罵声を、どうしても止めることが出来なかった。

「いったい、いつまでボンヤリ新人気分でのよっ！」

頭の片隅で、どこかで聞いたセリフだと思いつつ、一気にまくしたてる。

「私だってね、上司からやるべき仕事を、いっぱい渡されてるんだから！ いちいちアンタ
のことなんか、かまってるらないの！」

リサのまるくて大きな目に、見る間に涙がたまってくる。

「すみません、先輩。すぐやり直します」

「もう、直しといたわよっ！」

怒鳴りながら、私は、ある違和感をかんじていた。

(このセリフは、私が誰かに言われたものじゃなかったっけ?)

その夜、私は何気なく本屋の前を通りかかった。すると、またもや目に飛び込んできたのは、あの黒いカバーの本だ。ガラス越しだというのに、ひときわ目立っているのがよく分かる。あ、あの本まだあるんだ、と思う。どうやら結構売れているらしい。私は、平積みされているその本の前に再び立って、前回見たのと同じページを開いてみた。もう一度、書かれている言葉をくりかえしてみる。

「自分が誰かからされたことは誰かにしたくなりません、か……」

今日、自分がリサに向かってぶつけたセリフを思い出した。どこかで聞いたことのあるセリフだと思いつつ、感情にまかせてぶつけてしまったが、あれは、私が江口に言われたセリフそのものではなかっただろうか。自分の行動がこの法則にピッタリとはまる感覚をおぼえた。まるで物理法則のように。

さらに、私は考えを巡らせてみる。江口に文句を言われたり、イライラをぶつけられたりするから、つい私もリサに当たってしまったっているんじゃないだろうか。そもそも、その江口

だって、上司から次々と仕事を任せられて、ストレスでいっぱいのはずだった。まさに、出来事や感情がリレーのバトンのように人から人へと手渡されて廻っていくような、そんな感覚だ。そして、私の思考はある結論へと辿り着く。

「つまり、リサから見た私って、私から見たお局の存在と同じで、ガミガミやかましいヒステリックな女って思われてることよね？」

分かっていたこととは言え、改めて自覚すると、ちよつとショックだった。私が毛虫のように嫌っている江口の存在。理不尽に怒るわ、扱いにくいわで、入社当時は「ああはなるまい」と心に決めていたはずなのに。今や、同じ穴のムジナなのか、とため息をつく。「そういえば……」私はさらに過去に思いを巡らした。

高校時代、私はバリバリ体育会系のバスケット部に入っていて、それはもう厳しく先輩からも指導されたし、後輩の指導にもあたったものだった。なかには、やつぱり出来の良くない子もいて、理不尽に怒ったりイライラをぶつけてしまったこともあったっけ。

今や私は、江口との関係の中で、この後輩と同じ気持ちになっている。これが「自分が誰かにしたことが誰かから返ってくる」ということか。

まだ、にわかには信じられないけど、この法則が正しいとしたら、しつぺ返しのように同じ立場を経験してしまうことになるらしい。

私にとって、ただ「ムカつく」だけの存在だったお局の江口。だけど、今日はじめて、上司から渡される膨大な仕事のプレッシャーと、出来の悪い後輩たちに挟まれた、その立場の苦しみや葛藤を垣間見た気がするのだ。

(もしかしたら、私が誤解している部分もあったかもなあ)

私は、やたらに存在感のある金の箔押しタイトルをもう一度見つめてみる。

『ザ・ルーツ』私は出来るだけ、人が触ってなさそうな本を選んでレジに並んだ。そして、本を手にした私は、電車を降りるとき、とんでもなく意外なことを考えている自分に気が付いた。

「江口（センパイ）と一度きちんと話がしてみたい」と。

四

不思議なこともあるものだ、と私は思う。あの本『ザ・ルーツ』を読んでから、江口先輩（と呼ばせていただく）の顔を見ても、以前のように腹が立たなくなったのだ。それどころか、彼女のイライラの原因を考えもしなかったことに、申し訳ない気持ちすら感じている自分がいる。

まだ、半信半疑だけど、あの本によれば、自分の苦手な人や嫌いな人は、自分の鏡のようなもの、ということらしい。つまり、誰かの自分に対する態度は、自分の誰かに対する態度と同じ、と考えることが出来る。そうになると、誰が悪いわけでもない、と思えるようになってきた。

そして、私はひとつの決心をする。「江口先輩を飲みには誘おうではないか」と。日和見主

義の私からしてみれば、この決心は、人生最大級のチャレンジと言っても過言ではない。しかし、これを機に『何かを変えたい』と息巻いている自分も確かにいるのだ。

「江口センパイ！」

乗りかかった船なので、もはや迷いはなかった。走る勢いで、帰宅直前の江口先輩の背中に声をかけた。もちろん、江口先輩は怪訝そうな顔でこちらを振り返る。この反応は、予測済みだけど、

「あの！突然すみません！もしよかったら今度、一緒に飲みに行きませんか？」
恥ずかしいくらい声が裏返ってしまった。

「今度……？」

いぶかしげに眉を上げた江口先輩だったが、次の瞬間、意外な言葉を口にした。

「いいわよ。でも、今日じゃダメかしら？」

きよ、今日ですか……？急転直下。あまりの展開の早さに、戸惑いながらも、目をそらさずに私は頷いた。乗りかかった船とは言ったが、果たして、どうなることやら。

「私のこと、怖かったでしょう？」

生ビールで乾杯したあと、開口一番そんなことを言う江口先輩に、私は面食らってしまった。ほの暗い間接照明に浮かび上がる、落ち着いた空間。江口先輩の行きつけだというその居酒屋の大人びた雰囲気、私の緊張を余計に大きくしていると言うのに……。

「いえっ、私のほうこそ、いつも失敗ばかりで、ご迷惑をおかけしてしまって。しかも、無愛想で……。すみませんでした」

混乱しながらも、思わず素直に非礼を詫びる。

「いいのよ。私も昔はあなたみたいだった。……怖いなら怖いってハッキリ言ったらいいし？」

江口先輩は、試すような、少しいたずらっぽい目を私に向けた。会社では見たことのない、リラックスした表情だった。私は、少し迷ったけれど、

「はあ。じゃあ、正直ちよつとコワイです」

と、真顔で返した。その一言で、江口先輩は吹き出し、私の緊張は笑い声に変わる。先輩との距離が一気に縮まった気がした。

そして、ふたり並んで座ったカウンターに、たくさんの料理が並ぶにつれ、他愛のない話

は、少しずつ本音トークに近づいていった。

「女性が会社で長年働きつづけるって大変よね」

「そうですね」

カウンタ―越しに見える生け簀の魚たちを眺めながら、二人そろってため息をつく。しかし、私は寂しそうな江口先輩の横顔に少し戸惑ってしまう。私は、彼女のことを、いわゆるキャリアアウーマン的な「強い女性」で、仕事に対する迷いなんて微塵もない人だと勝手に思っていた。だから、時間が経つにつれ、江口先輩が口にする本音に、共感しつつも私はひそかに驚いてしまうのだ。

(やっぱり私、この人のこと誤解してた。冷血でロボットみたいな人だと思っていたけど、本当は血のかよった一人の女性なんだなあ)

なんて、客観的に聞くと失礼なことを考えつつ、ある法則を思い出しながら、私はまたビールのおかわりを注文する。主導権？ は、いらないけれど「今日のこの席が、先輩と私にとって、実り多い、ハッピーなものになりますように」と祈っていた。

ルーツの法則

出来事や人間関係は、「身近な誰かの理解されていない感情」を理解させるように発生します。「理解されていない誰かの感情」を理解することによって、その出来事や関係への、主導権、制御権を手にすることになります。

「私も、一応、結婚とか考えた時期もあるのよ。でも、いまさらよね。友達の話なんか聞いてると、やっぱり自分には向いてないなあって思うしねえ」

やっぱり酔いがまわってきたのか、少し頬を染めた江口先輩は、頬づえをつけて遠くを見ている。

「上司もね、どうやら私のこと辞めさせたいみたい。経費のかかるお局は、会社にとって結局はお荷物なのよ」

諦めたようにつぶやく江口先輩の姿を見て、私は「あれ？」と思った。この感覚は、以前にも味わったことがあるような。いや、以前と言うより、かなり頻繁に。

「あなたは、まだ若いじゃない。付き合ってる人がいるなら、早く結婚したほうがいいわよ」
居酒屋の、あざやかな朱色の暖簾をくぐり出て、江口先輩は財布をしまいながらそう言った。なんと、江口先輩は「いいのよ」の一言で、私の分まで飲み代を支払ってくださったのだ。そして、私は夜風を受けて、ますます寂しそうな、その横顔を見ながら、さっきの感覚を思い出す。

（そっか。江口先輩って、なんとなくお母さんに似てるんだ）

そういえば、この前、母の愚痴をちゃんと聞いてあげてなかったな。そんなことまで思い出し、私は、ちよっといたたまれない気分になっていた。

ルーツの法則

あなたに発生する出来事、人間関係の根源（ルーツ）は、あなたの両親、祖父母、兄弟、親戚など、あなたの出会った（出会う可能性のあった）親族にあります。

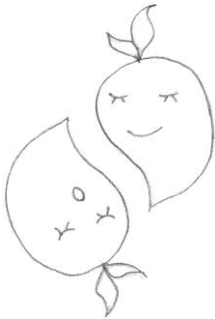
駅へと歩く道すがらも、話は尽きず、気が付けば終電間近という時間になっていた。

「江口先輩、今日はごちそうさまでした。先輩とお話が出来て、凄くうれしかったです」

もちろん、「すべて分かり合えた」なんてわけにはいかない。だけど、私の心のなかに素直に湧き上がってきたのは、先輩への親しみと感謝の気持ちだった。そして、私はとつさにあることを思い立ち、鞆の中に手を伸ばした。

「それで、お礼と言っては何なんですが、最近とても面白い本に出会ったから……。先輩もよかったら、読んでみてください」

衝動にかられて、私は江口先輩に『ザ・ルーツ』を手渡した。



五

あれから数週間。私は今、信じられないくらい穏やかな心持ちで、仕事に取り組んでいる。うっかり鼻歌まじりにコピーを取ってしまうほどに。そして、それはどうやら江口先輩も同じ様子で、私に対してイヤミや文句を言うことが、嘘のようになくなった。あの日、勢いで読みさしの本を差し上げてしまったことを、少し後悔していたので、私は胸を撫でおろしていた。

さらに驚くことに、影響は後輩のリサにまで及んでいる。あれほど連発していたミスが、ほとんどなくなったのだ。これには、私もびつくりしてしまう。そして、それはあの本に書いてあった法則どおりだったのだ。

ルーツの法則

人間関係には、上位者と下位者がいます。

通常は、お金を払う側（エネルギーを与える側）が上位者で、受け取る側が下位者です。

上位者とは、あなたに対して強制権のある存在です。

下位者とは、あなた自身に強制権のある存在です。

あなたが上位者に発生させた感情は、あなたの下位者から返ってきます。

あなたが下位者に発生させた感情は、あなたの上位者から返ってきます。

ストレスなどネガティブなエネルギーは、上位者から下位者に流れやすく

感謝や尊敬などのポジティブなエネルギーは、おもに下位者から上位者に流れます。

「えーつと、ここで言う上位者、下位者の関係って、『江口先輩↓私↓リサ』…ってこと

になるわよね」

あの飲み会以来、江口先輩との関係が少しずつ良くなってきた私。自分でもにわかには信じがたいことだが、今では冗談を飛ばし合うくらいの仲になっている。すると、あれほど鈍くさかった後輩のリサが、テキパキと仕事をこなすようになってきたのだ。その変化を間近で見た私は、こんなに気が付く子だったんだ、と正直驚いていた。

それだけじゃない。リサの急成長に連動するかのように、上司から私への評価も上がってきたみたいなのだ。その証拠に、来春から動き出す新しいプロジェクトの補佐役に抜擢された。

止まっていた歯車が、穏やかに動き出したかのようだ。でも、私が、特別なにかを変えたわけじゃない、と思う。私はただ、きっかけを作っただけにすぎないのだと。かつては全然つながりなんてないと思ってたこの世界が、こんな風に影響しあっていたなんて……。

そして、私には、もうひとつ気付いてしまったことがある。もはや私のバイブルになりつつある『ザ・ルーツ』のなかでも、特に何度も読み返したこのフレーズ。

「人にされたことは、自分も人にしてしまう」

この法則によって、人間はさまざまな立場を経験し、過去に自分が関わってきた人の気持ちを理解できるようになっている、ということらしい。私も、もちろん実地に体験しているし、この法則の正しさは理解できているつもりだ。しかし、これによって、私は目を背けたくなるような事実を発見してしまったのだ。

「私、お母さんにされたことを、そのまま大輔にできてしまったわ！」

私が疲れて帰宅するなり、父の愚痴を私にぶつけてくる母。何てうっとうしいんだと思っ
て、私はいつも耳をふさいでた。だけど、同じように疲れて仕事から帰ってきた大輔に対し
て、私は同じことをしてしまっていたのだ。それと全く気付かずに！

（大輔、こんな気持ちだったのか……）

給湯室から見える青い空を眺めて愕然としていたら「ヴヴヴヴ」と制服のポケットの中で
携帯が鳴った。

大輔からのメールだった。

それは、めずらしく時間ができたとやう、大輔からのデートの誘いだつた。夜景のきれいな
レストランで、私は大輔と向かい合わせに座り、江口先輩との間に起こつたことの顛末を

少し興奮しながら話した。思えば、大輔に対して愚痴以外の話題を提供するのは久しぶりだ。そう気付いて私はひとり反省する。

「へえ、しばらく会わないうちに、そんなことがあったんだ。あれほど嫌っていた江口さんと、まさか仲良くなるとはね〜」

大輔は驚きつつも、自分のことのように顔をほころばせた。

「私もビックリしちゃって！ 人の気持ちってなかなか分からないものね。江口先輩のこと、完璧に誤解してたもの。鉄で出来たロボットみたいな人だと思ってたから」

「なるほど、イメージは伝わるよ」

二人でクスクスと笑い合う。こんなふうには穏やかな気持ちで大輔と話をするのは、どれくらい振りだろうか、と思うとうれしい反面、複雑な気持ちだ。そして、私はこう続けた。

「でね、私、反省した。色々あって、大輔の気持ちがちよつと分かったの。大輔、疲れてるのに愚痴ばかり言っちゃって。私、うっとうしかったよね。大輔に自分のことばっかり考えてるなんて大口たたいちやってさ。それって、やっぱり私のことだったよ。ごめんね」

「ごめんね」という言葉が、素直に口をついて出る。そして、それを聞いた大輔は、少し真剣な面持ちになった。

「いや、俺のほうこそ、ごめん。いつも自分の仕事ばっか優先してさ。優子のこと、全然かまってるやれてなかったなって。反省するのは、こっちのほうだよ」

大輔はそう言うと、少し頭を下げた。思いがけず優しい大輔の言葉に、私は驚きつつも少し照れてしまう。だけど、こんなふうに互いを思いやりあえる関係って、やつぱり素敵だな、と思う。長い間わすれていた感覚だ。

(自分が変わったら、いつのまにか人も変わる…)

これも、法則どおりだ。私は、デザートのケーキをほおぼりつつ、ひとり納得した。

ルーツの法則

発生する出来事を、自己責任として考えられた時、その出来事に対する主導権が手に入ります。そして、その出来事からの恩恵を、(効率的に)受け取ることができます。

六

そういえば、最近マスターの顔を見てないなあ。忙しい一週間が過ぎ去った金曜日の夜、電車から見えるネオンの光を見て、私は突然そんなことを思い出した。

私には、ちよつと前まで行きつけのバーがあったのだ。「マスター」とは、その店主のことである。薄暗くモダンな雰囲気の内とはうって変わって、マスターはナイスミドルと
は言いがたい、深いグリーンのエプロンの似合う、きさくなオッサンだったが、そこが私のお気に入りだった。そして、私のグチに耳を傾けてくれる貴重な存在だったのだが。

「マスターに癒されたくて、三日と空けず通ってたのになあ」

人の良さそうなマスターの笑顔と、うっすら光る頭を思い浮かべ、私は首をかしげる。そして、いつものように『ザ・ルーツ』を鞆から取り出し、あるページに目を留めた。

ルーツの法則

お金はエネルギーの塊です。お金は入ってきたのと同じ方法でいつか出て行くことになります。

確か、ストレスなんかのネガティブなエネルギーは、上位者から下位者に流れやすい、ということだった。バーに行くと、私がお金を払う立場になるから、お客さんである私は上位者で、マスターは下位者。私がお金でもらったストレスを、お金と一緒にマスターに流していた、ということになる。

そして、今は比較的ストレスなくお金を稼いでいるから、ストレスを流す必要がなくなっている。だから、自然とバーに足を運ばなくなった、と言うことになるようだ。

私は、電車を降りると、そのまま駅前のスポーツクラブに足を踏み入れる。実は最近、思いついて入会したのだ。ちょうど、お酒を飲むために使っていたお金で。ずっと以前から、

行きたいと思っていたのだが、金銭的にも精神的にも余裕がなくて、なかなか実行に移せなかったのだ。

『ザ・ルーツ』によると、プラスのエネルギーは下位者から上位者にのぼりやすい。とすると、私の下位者は後輩のリサ。リサは最近、私の期待に応えようと、一生懸命仕事をしてくれる。だから、私も自分のレベルを上げるようなお金の使い方が出来るようになってきたのかもしれない。

「なるほど、お金の使い方でいろいろ変わるのね……」

それから、数ヶ月。会社帰りにスポーツクラブに立ち寄り、たっぷり汗を流して帰るのが私の日課になっていた。身体を動かすのは気持ちがいい。まるで、体内に滞っているストレスが汗と一緒に流れ出るように。そして、うれしいことに、タバコもすんなりやめることが出来た。それに、こうして自分のために使う時間が増えると、あれほどしんどかった大輔との関係も、さほど気にならなくなってきた。

そして、私が足しげくスポーツクラブに通う理由は、実はそれだけじゃないのである。

「優子ちゃん、お疲れさま！」

スタジオレッスンを終えて、ロッカールームへと足を運んでいると、体育会系男子特有の

明るく屈託のない声に呼び止められた。振り返ると、サーモンピンクとレモンイエローのウエアに茶色の髪が光るのが目に映った。最近、仲良くなった里中さんだ。

「お疲れさま、里中さん」

私は思わずにつこり微笑む。

はじめてここへ来たとき、スタッフでもないのに、丁寧に器具の使い方を見せてくれたのが里中さんだった。しかも、里中さんは、今っぽいおしゃれな風貌なのに、なんと税理士さん（！）なのだ。そんなギャップと相まって、私のなかで里中さんは「気になる人ナンバーワン」に一気に昇格してしまった。

「毎日、大変ですね。勉強もあるんでしょ？」

ふたりで壁にもたれかかり、冷たいミネラルウォーターを味わう。

「うーん、でもまあ、今は雇われの身だし。独立のための勉強は着実に進んでるから」

腕組みをしながら、サラリと語るその横顔に、私は少しドキドキしてしまった。

（すごいなあ。里中さん、モテるんだろうなあ）

そんなことを、ぼんやり考えていると、思いついたように里中さんがこう言った。

「優子ちゃん、今日はもう帰るの？ もし良かったら、お茶でもどうですか？」

思わぬ提案に、私はただただ目をまるくする。

「い、いいんですか？」

その後、ロッカールームでひたすら身なりをキレイに整えたことは言うまでもない。

そんなことがあつてから、里中さんは、ときどき私をデート(?)に誘ってくれるようになった。たいてい、駅前のカフェで、軽くごはんを食べたり、時にはお酒を飲んだりすることもあるけれど、里中さんに特別な感情を抱いているわけではない、と思う。だけど、大輔と会えない時間に、他の男性と話をするのはちょっと楽しいのだ。

そして、その夜。私は、いい感じにほぐれた体で、シーツの上に転がった。ここ最近、就寝前に『ザ・ルーツ』をベッドに寝そべりながら開くのが私の日課になっている。

ルーツの法則

心（感情、恋愛）、意（思考、仕事）、体（身体、健康）、場（環境、住居）に変化を意識的に起こすことで、身のまわりに起こる出来事を加速したり、コントロールすることが出来ます。

加速とコントロール：。まだ、ちょっとよく分からないけど。そういえば、最近は人との出会いも多いし、いろんな出来事がたくさん起こっている。逆に、感情は安定しているといふか、コントロール出来ている実感はある。でも、これって、そういうことを指すのかな、と自分なりに分析してみる。

スポーツクラブに通いはじめて、だんだん体つきが変わってきたのが自分でも分かる。それに、タバコだつてやめられたし。これが「体」の変化かな？そして、行動範囲も広がっているから「場」だつて変化してるし。そうそう、里中さんに出逢って「心」も変化したかもし。最近、仕事のストレスもなくなってきたから「意」も変わってきてるのか。続いて、次のページをめくる。

ルーツの法則

お金は、そのお金を稼いだ時に発生したストレスを発散させるように出て行き
ます。

なるほど、これには納得、と思わずうなってしまう。私も、お酒やタバコにたくさんお金を使ってしまった。あとは、自分の周りの人をモデルにして法則を当てはめると分りやすい。

例えば、男性なんかは、職場で評価されなかったり、家庭で大切に扱ってもらえなかったりすると、仕事で使ったエネルギーを補おうとして、キャバクラとか女の子と遊べる場所に行きたくなるんじゃないのかな、と思う。

ギャンブルなんかもきつと同じで、会社で決定権がない人ほど主導権を持ちたくてハマってしまうのだろうし。みんなそうやって、たまったストレスをお金と一緒に流しているのだと思う。

そして、『ザ・ルーツ』には、こんな怖いことも書いてあるのだ。

ルーツの法則

ストレスを発生させて稼いだお金は、貯めれば貯めるほど大きな痛みをともなつて出ていくこととなります。

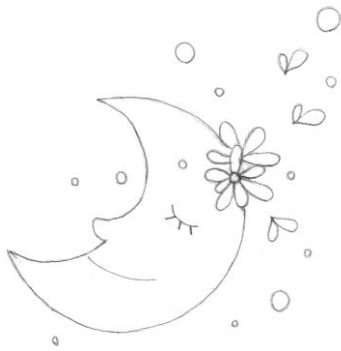
つまり、お金が使えない状態になると、ストレスは自分の中に蓄積されてしまつて、病氣やうつになつてしまいやすいらしい。それだけじゃない。結局は、治療費や入院費となつて、お金は出て行くことになるというのだ。

怖い話だと思いつつ、私には思い当たる節があつた。隣の部署の佐竹課長のことだ。最近マイホームを買つたのをきっかけに、頑張つて節約生活をなさつてみたいんだけど、見る見るやつれてしまつて。結局、大きく体調を崩して入院することになつてしまつたのだ。

会社のみんなは「家になにか憑いてるんじゃない？」なんて噂してたけど、こういうことだったのかも。もう少し、自由にお金を使えていたら、違った結果になつていたかもしれない、と思う。

「待てよ。と言うことは……逆に考えると、楽しくお金を使うことが出来たら、楽しく仕事をしてお金を稼ぐことが出来るかもしれないってことよね」

よし、さっそく私もこの法則にあやかろうではないか、と思いつ。明日、会社帰りに大好きなブランドのワンピースを買いおう。そして、ネイルサロンに、リフレクソロジーに、限定物のバッグに……。ああ、欲しいものが、たくさん……。まどろみながら『幸せなお金の使い方』について考えた私だった。



七

「こないだ、優子ちゃんがすすめてくれた本……『ザ・ルーツ』早速買って、俺も読んだよ」
けっこう興味深かったなあ……と言いながら、里中さんは重たそうな黒いカバンの中から、
付箋によってカラフルに彩られた黒い表紙の本を取り出す。

秋も深まったある日のいつものカフェ。私と里中さんの恒例になりつつある「お茶会」で
の会話である。私が単純なのか、里中さんみたいな勉強家の人に、オススメした本を誉めら
れると、さらに嬉しくなってしまうている。

「そうそう。俺ね、凄く印象に残った法則があるんだよ」

こちらの反応を見ながら、里中さんは、鮮やかな黄色い付箋の貼ってあるページを開き、
これこれ、と指をさして私に見せた。

ルーツの法則

ストレスなどの、ネガティブなエネルギーは、上位者から下位者に優先的に渡されます。その結果、下位者が上位者の代わりに、ストレスの発散や解消にお金を使ってしまうことがあります。

守秘義務があるから、詳しくは話せないんだけどね、里中さんはそう前置きして、

「俺、こんな仕事してるでしょ？ だから、いわゆる『お金持ち』の人たちとも関わりを持ったりするんだけど…。やっぱ、経営者がモラルに反するようなやりかたでお金を稼いでたりとか、その奥さんが頑張ってお金を貯めたりとかするときは、その家の子どもって、体が弱かったりするんだよ。すごく酷いアトピーになってたりとか、いくら病院に行ってもなかなか治らない、とかね。それって背景にこういうことがあるのかなあって。そうそう、そんな家は決まってお母さんが過保護だったりするよなあ…。」

と、落ち着いた口調で語った。なるほど、と私はその話を聞いて納得する。この法則を読んでも、どういう現象になるのか具体的に分からなかったので、目からウロコな気分だった。

「それで、考えたんだけど」
続けて、里中さんはかわいいいピンクの付箋を貼ってあるページをめくる。

ルーツの法則

効率の良いお金の使い方は、弱者の未来の発展と幸福のために使うことです。
効率の良いお金の使い方は、新たな価値を生み出す可能性のあるものを使う
ことです。
効率の良いお金の使い方は、あなたが価格以上の価値を感じるものを使う
ことです。

「ここに書いてある法則を応用すれば、なんとかなるんじゃないかなって。そうだな…た
とえば『寄付をする』…とか」

「寄付…ですか？」

「そう。まだこの法則を完全に信じた訳ではないんだけど、『人にしたことは返って来る』

っていう内容の法則があったでしょ？ あれをお金に応用すると、『困った人にお金をあげると、自分が困った時に誰かから助けてもらえる』んじゃないかと思うんだよ……」

「なるほど……」

「つまり、お金を稼ぐことや、貯めることで発生した悪い何かを解消するためには、やっぱりお金を使わないといけないんだよね。この法則が正しかった場合だけだね……だから、法則にも『効率の良い』って前置きされてるんだと思うんだけど」

「……はあ」

もはや私は、話についていくのに必死で、相槌にまで気が回らなくなっていた。

「たぶんね、法則では、寄付にお金を使うと効率良くストレスの解消ができたり、効率良く悪いことが起こり難くなるのかな……って。今度検証してみようかと思ったりするんだよ……」

そういえば、と、私は近頃の自分の行動を思い起こす。

「私も最近気になって、コンビニなんかで『お釣り寄付』はじめたんですよ。なんかいいですよね」

「そうだよね、俺もそうなんだよ。なんかすっきりするっていうか」



「本当そうですね……（里中さんって、やっぱり優しいし、真面目だし、頭がいいし……）
そんな尊敬にも似た複雑な感情を抱くたびに、今すぐ大輔に逢いたい……私はちよっぴり寂
しい気持ちになるのだった。」

八

木曜日の夜。平日なのにめずらしく、大輔からデートのお誘いがあった。小さなテーブルを囲み、赤ワインをオーダーした私はウキウキした気持ちを隠せない。というのも、偶然、ワインリストの中に、江口先輩がオススメと話していたワインを見つけたのだ……大輔と合流する前には、百貨店で限定物のバッグを手に入れたことも手伝って、さらに「ご満悦度倍増！」である。

「大輔、今日は仕事終わるの早かったんだね」

自然と声はずむのが自分でもよく分かる。

「そうなんだ。俺の企画が通って、プロジェクトが走り出したから、ちよつとひと段落だよ。スタッフもみんな頑張ってくれて、いい感じなんだ。優子、このまえ会社のこと色々話してくれたらどろ？俺も、少し周りの人に目を向けるようになってさ。仕事がまわりやすくなっ
た気がするよ。ありがとな」

「へえ、凄いいじゃない！ 大輔、頑張ってたもんね」

目の前にいるスーツ姿の大輔は、電話で声を聞いた印象よりも精悍な気がして、私もうれしくなってしまう。そして、ふと、通勤時間に電車で読んだ、ある法則を思い出した。

ルーツの法則

あなたが、自分自身を尊重するようにお金を使う時、その尊重は、あなたから、身近な他者に渡されることになります。その結果、あなたの周辺に尊重と豊かさが広まることになります。

（大輔に「ありがとう」って言われちゃった）

私が変わったから、大輔も調子が良くなってきているのか、はたまた大輔が良くなってきたから、私も変わってきたのか……。どちらが先かなんて分からないし、上手く表現できないけれど、お互いにバランスが取れるようになってきた、そんな感じ。きつと、大輔もそう感じてくれていると思うんだけど。

そんなことを考えていると、急に私をまじまじと見つめてくる大輔の視線に気がついた。「な、何？ どうしたの？ 私、顔になんかついてる？」

大輔とは長い付き合いだが、改めて見つめられると、なんとなく恥ずかしくて私は目をそらしてしまう。

「優子さ、最近ホント変わったよな。なんていうか、凄く明るくなった」

意外な大輔の言葉に、私は大きく目を見開いた。

「毎日、楽しそうっていうかさ。それに女の子らしくなったよ。そうだ、スポーツクラブに行き出したあたりからかな。：：なんかあったの？」

それは、いつもどおり落ち着いた大輔の声だったけれど、寂しそうな翳りが見えて、私は少し焦ってしまう。

「そうかな？ 別になにも変わってないと思うんだけど」

里中さんの顔が脳裏に浮かんだが、すぐにそれをかき消した。

「いや、スポーツクラブで新しい友達ができた、とか言ってたからさ。どんなかなってちょっと気になって」

弁解するように、大輔はワイングラスに視線を落とした。もしかして、と私は思う。



(大輔・・・やきもちを妬いてくれている・・・?)

今まで見たことのない大輔のそぶりに、ひそかにニヤけてしまう私だった。そして、はたと
思い当たることがあった。もしかすると、『ザ・ルーツ』に書いてあった「コントロール」
とは、こういうことを指すのかもしれない。私が「心」「意」「体」「場」に変化を起こして
加速させたから、主導権が私にまわってきたのかも。

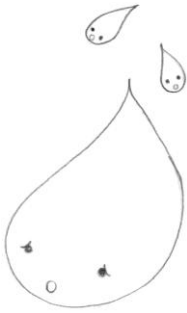
「なに言ってるの！ 大丈夫だよ！」

私は、大輔のなかの不安の種を消し去るように、出来るだけ明るい声で応えた。

九

世界はこんなふうにつながっていたんだなあ、としみじみ考える。私がこれまでに起こした行動なんて、それこそ、小さく些細なことばかり。だけど、それは波のように私を取り巻く人間関係を確実に変えていった。

そして、その根源は家族関係にあるというのが、『ザ・ルーツ』の教えである。



ルーツの法則

- あなたの人生は：・（※） 兄弟がある場合、全員で分け合うことになります
- あなたの両親の抱えたストレスを理解すること（受容）
- あなたの両親の抱えた問題を解決すること（解決）
- あなたの両親の抱えたストレスの解消と発散をすること（解決・受容）
- あなたの両親の我慢した内容を我慢しないこと、回避すること（理想・回避）
- あなたの両親のあきらめてしまった夢を叶えること（理想）
- あなたの両親に生きる意味を与えること（依存）
- などに費やされます。

さまざまに環境や心境が変わりゆくなか、そろそろ私も向き合わなきゃいけない、向き合いたいと思うようになっていた。そう、「お父さん」と「お母さん」に。

帰宅すると、父の安全靴が玄関に脱ぎ捨ててあった。よかった、お父さん帰ってきてる、今日は現場だったんだ：ずしりと重たいコンビニの袋を携えた私はそう思う。母の愚痴のとおり、父はお酒には、だらしない人なので、たびたび家を空けることがあるのだ。基本的に父は無口な人だし、私とも「大の仲良し」というわけではない。少なくとも、私が成人してから、二人きりで会話をした記憶もほとんどないくらいだ。

そんな父と、「今日は腹を割って話をしてみよう！ 晩酌会」を勝手に設定した私は、とりあえず、発泡酒を片手にソファで「モータースポーツ・チャンネル」を見ている父の前に立ちふさがった。

「お父さん、今日は私と晩酌しない？」

と、コンビニの袋を突きだす。そして、会社帰りにコンビニで買ってきた、おつまみのスルメ、サラミ、ミックスマツツ、最後にビールをコップとテーブルに置いた。いきなりの娘の申し出に、動きを止めて様子を窺っていた父だったが、少し照れたように「いいぞ」と小さく言った。

「お父さんってあんまりしゃべらないよね」

晩酌に誘ったものの、特に話題を用意していたわけでもなかったもので、とりあえず、私は

缶ビールを開けながら、そんな話を振ってみた。

「そうかもなあ」

父は、かすかに笑いながら、要領を得ない返事をした。吐き出したタバコの煙を見つめるその顔は、なぜだか私にはさびしそうに見えた。「もつと、言いたいこと言ってもいいと思うよ」と、続けて私はそう言った。

和気あいあい、とは言いがたい雰囲気ではじまった晩酌会。母も早々に床についてしまい、ますます気まずさを感じているのか、チャンネルを変えた父はテレビの画面にばかり目をやっている。私は、そんな空気をなんとか変えたいと思うのだが、どの話題も父のぼんやりとした相槌に、かき消えてしまった。

(もつと簡単に、いろいろしゃべれると思ったんだけど……)

コンビニでビールを買うときに、はりきっていた自分のテンションを思い出して、私はちよつとへこんでいた。

深夜になり、そのうち父は、ニュース番組を見ては「政治は良くならんなあ」とぼやき、CMを見ては「最近の笑いはよく分からん」とつぶやきはじめた。ちよつと酔いがまわって

きたようだ。

そこで、私はちよつとフランクに「お父さん、結婚前はどんなかんじだったの？」と、話を振ってみた。すると、酔いも手伝ってか、だんだん機嫌が良くなってきた父は、ガテン系職場の腕っぷし重視の人間関係の厳しさや、一歩間違えば事故につながりかねない危険な現場を担当したこと、トラブルの発生時には、丸三日も寝ないで会社のために走り回ったこと、そしてリーダーとして年長者を率いて仕事をしたことなどを、楽しそうに、懐かしそうに苦労自慢？ してくれた。

（へえ。私が生まれる前のお父さんかあ）

父と母は、私の誕生を機にこの家に越して来ていた。その結果、父はバイク通勤から電車通勤になり、（母の提案もあり）内勤の多い職場に異動を申し出た、という話は聞いたことがあった。

だから、それは私にとってはじめて知る、若さというエネルギーに溢れた父親の姿であった。そして、その姿は、仕事の内容は違えども、なぜか大輔とかぶってくるのだった。

（え？ お父さんって実は大輔に似てる・・・？）

意外な事実にも、おつまみを食べる手を止め、少し疲れの見える父の顔を、私はもう一度見

つめなおす。お父さんも、今の太輔みたいに、徹夜で仕事をしたり、プロジェクトを成功させるために走りまわったり、私の知らないところで、会社のために、自分のために、そして家族のために、たくさんの苦しい局面をくぐり抜けて来たんだ……。そのとき、私は、はじめて父の苦労をリアルに感じたのだった。

「ねえ、お父さん。結婚してなかったらどうしてたと思う？」

なぜ、そんな言葉が出てきたのか分からない。だけど、私は胸の中に何かチクチクと痛む苦しい気持ちを抱えていた。視線の先にある父の横顔は、遠いところを見ているようで。

画面には若手のお笑い芸人と、グラビアアイドルのお見合いパーティの様子が、面白おかしく映し出されている。

「そんなことはないだよ」父はこちらもテレビも見ずに唐突に言葉を返してきた。

「お父さん、ごめんね……」

何を言われたか分からなかった私は、とっさに謝罪の言葉を口にしてしまっていた。本当は「ありがとう」と言えたらよかったのに、父はすでに黙ったままテレビに視線を戻していた。その表情は、私のいる場所からは見えなかった。

午前をまわってから、晩酌会はお開きとなった。何かをはつきり分かりあえたわけではないけど、ぼんやりしていた父の姿をリアルに感じて、今まで歩み寄りなかつたことに、私は少し恥ずかしさを感じていた。けれど、お父さんの立場からだと、「今さら、娘に「ごめんなさい」なんて言われたって」って感じだったのかな……

そんなふうを考えながら、ビールの空缶をつぶしてゴミ箱に入れてみると、背後から父の咳払いがした。少し間をおいて、

「優子、今度は外にでも飲みに行こうや」と父。

私も、少し間をおいて「うん」と答えた。じわりと目頭が熱くなった。

ルーツの法則

人が人を理解するということは不可能かもしれない。しかし、あなたが他者を誠実に理解しようと努めることによって、より良い関係を築くことができます。

十

心なしか、最近、母の愚痴が減ってきているようだ。最初は、私がスポーツクラブに通いはじめて家にいる時間が少なくなってきたからかな、と思っていたのだが、どうやらそれだけではないらしい。

いつのまにか、母は水彩画を習いはじめていたのだ。そういえば、花をモチーフにした見覚えのない絵が、日に日に家のなかに増えていくのに気付いてはいたが……。お世辞にも上手いとは言いがたいそれらの絵は、母が手がけたものらしかった。母は、もともとそんなふうに行動的な女性なのだ。

ぼっかりと時間が空いた休日の午後、私は久しぶりに母とふたりで出かけることにした。もらったばかりのボーナスで、両手がふさがるくらいに買い物をして、母には、うすいピンクの花をかたどった小さなブローチをプレゼントした。

そして、お目当てのものを買えて、弾むその足で、イタリアンレストランへ。

「あら？ ハナミズキみたいね……」母はブローチの包みを開けて、「ここで大丈夫かしら」と早速合わせてくれている。

食後はケーキバイキングへ。母も、数種類のケーキと焼き菓子を取り皿にならべて、満足そうな様子だ。

「お母さん、最近たのしそうだよね」

私は、バターの香りが濃厚なマドレーヌを口にほおばりながら、なにげなくそう言った。

「そうねえ。最近はお父さんのことでも、あんまりイライラしなくなったわ。それに絵画教室も楽しいし」

「……お母さんはさ、そうやって、活動的になってるほうが似合ってるっていうか。ずっと家にこもりつきりなの、しんどかったんじゃない？」

最近の母の変化を見て、素直に感じていたことだ。

「そうねえ……。確かに、以前はたいへんだったわ。おばあちゃんが生きてらしたころは特に……。家事に、介護に、外に出るどころか、ひと息つく間もなかったもの」

私は、そんな話を想像するだけで、息がつまりそうになる。

「お母さん、もし結婚してなかったら、結構やり手のキャリアウーマンになってたんじゃないのかなあ」

私は、少し複雑な気分になりながら、そう聞いてみた。私という存在が、若かりし頃の母の可能性をつぶしてしまったのでは？ 少しだけそんな気がしていて。

「うーん、そうねえ」

母は、ケーキを食べる手を止め、少し考えた様子だったが、

「でも、やっぱり結婚っていいものよ」

と、明るく顔を上げてそう言った。

「確かにねえ、結婚した当初は、家にずっといなきやいけないし、お姑さんは気難しいしで、大変だったんだけど、優子、あなたが生まれて、お母さんはすごく幸せだったわ。なんだかんだ言って…そうそう、大分前に話したことがあると思うんだけど…」

母は何か思い出したように続ける。

「玄関のポスト側の庭に、ハナミズキの木があるでしょ？ あれ、あなたの木なのよ…あれはね、あなたが生まれた次の日に、お父さんが植えたものなのよ。病院に遅くにやってきたから今でも覚えてるわ…「植えたったわ」ってここにこにこしてたのよ」

「へえ、そうなんだ」特にこれといった感傷もなく私は応じた。

「お父さんね、昔は本当に優しいひとだったのよ。そうよね、お父さんも、私はね、好きで結婚した人なんだしね：」母は何か考えを巡らせながら、自分自身を納得させるように、一言一言を確認するようにしゃべっている。私はといえば、母の口から出る、意外な言葉のオンパレードに、目をまるくするばかりだった。

「お母さん、やっぱり変わった」

思わず、素直な感想を口にする。

「あら、そお？でも、それを言うなら優子のほうじゃない！最近、はつらつとしてるわね。家のなかが明るくなったわ。優子、たまにお父さんとリビングで飲んでるでしょ？近頃はお父さんも、まっすぐ家に帰ってくるようになったと思わない？」

：：：そう言われてみれば、そうかもしれない、と思う。家のなかも、以前より居心地がよくなっている。

（ううん、家のなかだけじゃない、職場だって、スポーツクラブだって、それに、大輔との関係だって：：）

「優子、最近、大輔くんとはどうなの？」

私の考えを読んだかのように、母が話題を変えてきた。

「うーん。どうって、別に……」

「結婚の話とか、出てないの？ あなたもそろそろ、いき遅れの部類に入るわよ〜」
いたずらっぽく微笑む母の目は、やっぱりどこか江口先輩に似ている。

（結婚か……）

少しだけ、現実味をおびてきたような気もするけれど……。

ルーツの法則

人は、現在を肯定できた時に初めて、未来への希望を持つことができます。
そして、その結果、どんな過去をも、肯定できるようになるものなのです。

十一

ルーツの法則

男性のパートナー選びの傾向…

「母親の気持ちを理解できる経験をさせてくれる女性」

「母親の潜在的な理想を叶えることが出来る女性」

女性のパートナー選びの傾向…

「父親の気持ちを理解できる経験をさせてくれる男性」

「父親の潜在的な理想を叶えることが出来る男性」

「結婚」をキーワードにページをめくっていくと、『ザ・ルーツ』には、こんなことが書いてある。何回読んでもむずかしいフレーズだ。

(うーん、よく分からないけど、相手のご両親のことを知らないと……ってことよね)

二月も半ばを過ぎ、付き合って四年目を迎えようとしているというのに、私は、大輔のご両親の話を、ほとんど聞いたことがない。確か、大輔のお父さんは、会社の経営をされていて、大輔が大学を卒業した直後に亡くなった、という話だった。私が知っているのは、この程度。大輔は、ご両親：・特に父親の話は、あまりしたがるらないのだ。

(大輔のお父さんとお母さん……。いったいどんな人たちなんだろう)

少し雪の散らつく日曜日、私と大輔は居酒屋で鍋をつつきながら、小さな祝賀会を開いていた。なんと、大輔の企画したプロジェクトが認められ、超大手のメーカーが取引先として決まったのだ。久し振りにテンションの高い大輔は、お気に入りの日本酒をパカパカ飲んでいる。

そんな楽しい雰囲気の中、私は、ある決心をしていた。「大輔に、ご両親のことを聞いてみよう」と。もちろん、お祝いムードに水をさすことになってしまいかもしれないし、大輔からすれば、触れられたくない過去かもしれない。だけど、それでも……。

店を出ると、「おーっ！ 白い！」と大輔がおおげさに歓声をあげた。見ると、うっすら地

面が雪に覆われている。自販機で缶コーヒーを買い、バス停に向かっていると、すぐ脇を鈍いエンジン音を立てたバスが通り過ぎる。

「うわ、しまった。今ので最後だ……」

バス停で時刻表を見るなり、大輔がぼやいた。仕方ない、タクシーでも拾うか、とため息をついて、停留所のベンチで缶コーヒーを飲みだした。

「ねえ、大輔……ここで、ちょっと話してもいい？」

私も、隣に座って口を開いた。なに？と、缶コーヒーから口をはなして私をみる大輔の表情は明るい。

「あのさ……さっきもお店で話したけど、私、お父さんと飲みに行ったじゃない？それで、お父さんとデートするところな感じなんだなって、お父さんがちょっとかつこよく見えちゃったりして……」

私は、そんな大輔のようすに気圧されて、なかなか本題に入ることが出来ない。鍋をかこみつつも、何度か挑戦したのだけれど。

「へえ、そうなんだ。なんかいい話じゃん」

相変わらず、にこにここと機嫌のいい大輔の返答に、私はまだ少し気後れしてしまう。

「それでね、それで、私……、今日どうしても聞きたいことがあるの……」

それでも、息を整えながら、言葉をつぎ足した。大輔の表情が少し硬くなったのが分かる。

「大輔の、お父さんのことなんだけど……」

覚悟をして言ったセリフなのに、大輔は「なんだ、そんなことか」とでも言うかのように表情を和らげた。そして「で、なに？」と促す。

「うん、大輔のお父さんのことなんだけど、お父さんって、どんな方だったの？……私、お亡くなりになってるから、触れちゃいけない話題かなって思ってた……。だけど、大輔の口からも、あんまり聞いたことがなかったから、それで……」

必死に喋る私の言葉を受けて、大輔は何かを考えている様子だったが、やがて、

「……うん。俺、親父のこと、まだどっかで恨んでるから……。もう過ぎたことだけどさ……」
と、つぶやくように静かな声で言った。

「それって……どういうこと？」

おそろおそろ私が問いかけても、大輔は、伏目がちに一点を見つめるばかりだ。最終バスの通りすぎたバス停に、しんしんと、雪が降る音さえ聞こえてきそうな沈黙。耐え切れずに、私が口を開こうとした瞬間、

「そうだな……」と、大輔が口をひらいた。

「少し、話そうか」

「俺の親父は、小さな工場を経営してたんだ。何もないところから、会社つくって、社員も抱えて……。子ども心に、俺の親父は凄いつて尊敬してたもんだよ」

大輔は、淡々と語りだした。すでに冷え切った缶コーヒーを両手で握りしめながら、私は大輔の言葉に耳をかたむける。

「だけど、家庭はほったらかしで、俺は親父に遊んでもらったことも、どこかに連れてってもらった記憶もほとんどない。景気が悪くなってくると、たまに帰ってきてても不機嫌だし、酔って暴れるなんてことも、ざらだったよ」

静かに語りつづける大輔のとなりで、聞き慣れない言葉に、私は身体をこわばらせてしま

う。
「そんな時、決まってお袋はこう言うんだ。「お父さんは、自分のことしか考えてないのよ」って。だから……。いつだったかな、優子に似たようなことを言われたことがあっただろ？あれ、正直けっこう、こたえたよ」

「ごめん、大輔、私……」

私は、感情のままに大輔にぶつけてしまった言葉を思い出し、いたたまれない気分になった。「いいんだ」と、大輔は、ちよつと苦笑いする。

「あの時、けつきよく俺も、大嫌いな親父とおんなじなんだって思ってたさ。しばらく凄いや己嫌悪だった。でもさ、同時に親父の気持ちもちよつと分かった気がしたんだ。なんていうかな、親父も、仕方なかったんだなって。社員と家族を守らないといけない重圧と、その守るべき存在から理解してもらえてないで、そりゃ酒飲んで暴れたくもなるよ……」

諦めたような、それでいて何かを悟ったような言い方だった。

「で、親父は肝臓こわして、そのまま入院。けつきよく会社つぶしたんだ。そこからは、家はもうガタガタで。借金もたくさんあったしね。お袋と俺で、なんとかやってきたんだ」

相変わらず、淡々と話す大輔の声を聞きながら、私は、何も知らずに大輔と向き合ってた自分を恥じていた。

「親父が、息を引き取る直前、言った言葉が「お前たち、しっかりしろ」だったんだ。俺は、その時は、まったく意味が分からなかったんだよ。だって自分で滅茶苦茶しといてだよ……」
少しの間、大輔は沈黙する。

「……だから、そんな親父を俺はずつと許せてなくて、こうして同じ、というか近い立場に

なってみて、やっと、親父の気持ちを理解出来たんだ。許すも、許さないもないんだよな：親父はちゃんと皆のために生きたし、最善を尽くしたんだよ。ただ本当に親父は不器用だった。それだけのことだったんだよ。本当にそれだけだった：」

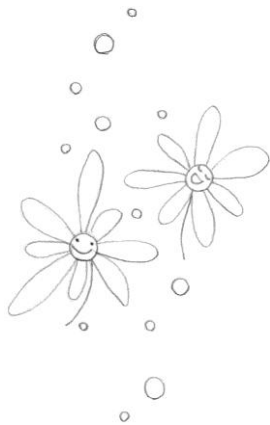
大輔は、すぐに消えてしまう白い息を目で追いながら、静かにそう言った。

「大輔、ごめんね、私、自分のことを棚に上げて、しんどい思いをしてる大輔によっかかってばかりだったね：」

私は大輔のコートの袖をつかみながら、振り絞るように言葉をつむぎ出した。だけど、必死に思いを伝えようとするほど、声が震えてしまう。

「私ね、最近いろんな人と触れあって、いろんなことが分かったの。だから、私、もつともつと変わりたいって思う。大輔を支えられる女性になりたい。大輔が背負っているものを、一緒に分かち合いたいのに」

私は、いつのまにか溢れてきた涙で、顔がグシャグシャになっていることに気付いてはいたけれど、気持ちを止めることが出来なかった。そんな私を見つめながら、大輔はまだ何かを思いつめている様子で、私は自分の発した言葉が不安になって、さらにしゃくりあげてし



まう。

「…ありがとう、優子」

そして大輔はおもむろに、その大きな手をのぼし、私の髪をくしゃくしゃと撫でながら、飲みすぎだぞ、と穏やかな声で言った。私がおそるおそる顔を上げると、その顔は、何かを決心したかのような、すがすがしい表情をしていた。

十二

春になり、私は三十一歳の誕生日を迎えた。相変わらず会社は、戦場のように忙しい。私は、そんな嵐のなかを、江口先輩やリサと協力しあって、何とかしのいでいる。

昨日みたテレビの話や、おいしいランチのお店の話など、屋上でお弁当を広げながら、三人で盛り上がる午後は格別だ。

「もう桜がほころんできたわね……」

江口先輩は、まだ少し冷たさの残る風を受けながら、相変わらず落ち着きのある声でしみじみと言う。

「江口センパイとごはん食べるの、今日が最後なんて、寂しすぎます」

リサは、その大きな目いっぱい涙をためて、震える声でそう言った。マスカラがにじんでパンダみたいな顔になってしまっている。

「リサちゃん、大丈夫よ。あとは優子ちゃんがいろいろやってくれるわ」

江口先輩は、来月からアメリカに留学することになったのだ。はじめて私と飲みに行った日、私が手渡したあの本『ザ・ルーツ』を読んで、「本当にやりたかったこと」に気付いたのだという。

「ね、優子ちゃん。いろいろありがとう。あなたがいるから私も安心して辞められるわ。あとはよろしくね」

迷いがふつきたような、すがすがしい表情で、江口先輩はニッコリ笑う。

「えーん、これからは、優子センパイがお局さまですねえ。江口センパイより断然コワイです」

リサは、冗談めかして、そんなことを言う。

「なんですって、リサッ！」

コラ！ と言いながら私は、ぺちんとリサの頭をたたく。そして、三人で思いつきり笑った。笑いながら、涙がとまらなかった。

家のなかには、春の花をモチーフにした母の水彩画で、あちこち、いろどられている。寝起

きの私は、それを横目に階段を降りながら、最近、上手くなってきたなあ、としみじみ感心する。江口先輩の送別会のなごりで、まだ腫れぼったい顔をした私は、ゆつくりとリビングのソファーに腰かけた。テーブルの上には、旅行会社のパンフレットが幾重にもかさなって散らばっている。

「お母さん、どこか行くの？」

私は、座った姿勢のまま、庭でスケッチをしている母に声をかけた。

「そうなのよお。ふふふ、お父さんと二人で温泉旅行に行こうって話になったの。何年ぶりかしら。うれしくって、つい、たくさんパンフレットもらってきちゃった」

振り返った母は、満面の笑みでそう言った。

「へえ、そんな話になってるんだあ。よかったじゃない」

仲むつまじい父と母の姿を思い浮かべて、私の気持ちも、じんわりとあたたかくなる。

「お母さん、おみやげよろしくね」

いつのまにか、私はソファーでまどろんでいたようだ。派手にテーブルの上を振動する携帯の音で、目が覚めた。(大輔からだ…) まだ、夢見心地な気分で、電話をとった。

大輔は、仕事で疲れているのに、わざわざ時間を作ってくれたのだ。だったら私は、その気持ちに応えるためにも、出来るだけキレイにしていこう。そう思って、私は、丁寧に仕度を終えた。



十三

早めに出かけたつもりだったのに、待ち合わせ場所には、すでに大輔の姿があった。

「大輔！」

あまり大輔を待たせたことのない私は、つい慌てて小走りになってしまう。

「お、優子！今日はキレイだな」

大輔は、私に目を留めるなり、誉めてるんだか何だか分からない言い方をするもんだから、私は肘で小突いてやった。

「今日は、って何よ。今日はって」

そんなふうにして、大輔が私の手をひいて連れていってくれたのは、予約の取れないことで有名なフレンチのお店だった。店内は、しっとりとしたピアノジャズが生演奏で流れている。お洒落してきてよかった、と密かに冷や汗をかいた私だった。

純白のテーブルクロスの上に、前菜、スープ、サラダ、パン……とお料理が運ばれるなか、大輔との会話は、いつも以上に弾んでいた。それに、ぱりっとした濃紺のスーツに、細いネクタイを締めた大輔の姿は、惚れ惚れするほど、凛々しくて、食前に飲んだシャンパンも手伝ってか、私は鼓動が早くなるのを意識せずにはいられなかった。

「こうしてると、昔を思い出すよね」

他愛もない会話が終わると、自然と、思い出話になった。付き合い出した頃に行った旅行の話から、ここ最近の話まで。「それにしても、よくケンカ売られたよなあ」と大輔は笑う。

「もう、それは言いつこなしょ」

私は、笑いながらも、ちよつとむくれて見せた。

メインディッシュを食べ終え、テーブルにはデザートが運ばれてくる。コーヒーをかき混ぜながら、ふと大輔を見ると、私の表情を伺うような、複雑な顔つきをしていた

「大輔？ なに考えてるの？」

不思議に思った私の問いに「何でもないよ」と、笑ってごまかす。

「だけどき、優子、ここ半年くらいで、ホントに変わったよな……」

私は、急に話の温度が変わった気がして、「あれ？」と少し緊張する。

「凄く居心地がよくなったっていうか、一緒にいると充電できるっていうかさ。よし仕事するぞーって気になるよ。…だから、最近は、優子に毎日会いたいなあって、もつと一緒にいたいって、ホント思うよ…」

「大輔…」

うれしいけれど、くすぐったい言葉に私は戸惑ってしまう。そんな私の目を、まっすぐ見据えたまま、大輔は続けた。

「だから、優子。俺の願いを叶えてくれないかな」

「…え？」

その言葉の意味を飲み込めず、ポカンとする私のまえに、大輔は青いビロード張りの小さな箱を差し出した。少し周りを気にするような素振りを見せながら、親指と人さし指でつまんで、そつと開く。

そこには、シャンデリアの光を受けて、キラキラと輝きを放つ、ダイヤのリングが入っていた。

「優子、俺と結婚して欲しい」

私は、驚いて大輔の顔を見上げる。

「え？なに？ どういうこと？」

私は、まだ何がなんだか分からない。大輔は、そんな私の様子をおかしそうに笑って、そつと箱から指輪を取り出した。そのまま、身を乗り出し、うわ、テーブル大きいなあと照れたように言いながら、私の薬指に、指輪をゆっくりと嵌めた。

「優子、俺と結婚してくれないか？」

(結婚：：？) 頭の中で、何度もその言葉を繰り返し、ようやく、事態の飲み込めた私から、セキを切ったように涙が溢れてきた。

「でも、でも、：：大輔、いいの？ 私なんかで：：」

ぼやけた視界のなか、大輔は笑いながら、期待してたくせに、と意地悪く言う。

「そんな、おまえなんか、がいいんだよ」

大輔は、そう言って手を伸ばし、以前、公園でしてくれたように、私の頭を撫でた。

「はいっ、私、ついていきます：：、一生、大輔に：：」

最後は、ほとんど声になっていなかった。

エピローグ

『優子ちゃんへ』

お元気ですか？ 私は、ボストンでの暮らしにも、ずいぶん慣れてきました。

やっと、本場で心理学を学べることになったんです。

ずいぶんバタバタしたけど、大学編入の手続きもすんで、ようやく私も夢に向かって、歩みだすことが出来ました。

それというのも、ずっと前に優子ちゃんがくれた、あの本のおかげです。

実を言うと、私は、ずっと両親に対してわだかまりを持っていたんです。結婚を前向きに考えられないのも、親のせいだって、ずっと思っていて。

私は、外面ばかり良くて、家では高圧的な父と、父のグチばかり言うくせに、状況を変える努力もしない母に育てられました。

私は、そんな母の生きかたが、本当にもどかしくてたまらなかった。

だけど、あの本を読んで、気付いたんです。私も、母親と同じような生きかたをしてしまっている。そして、本当はもっと自由に生きていきたいんだって……。

一歩ふみだす勇気をくれたのは、優子ちゃん、あなたです。本当にありがとう。

ここは余談なのですが、こちらにも桜の木があることに驚いています。たまたま気になって調べてみたのですが、昔、東京市からワシントンDCに桜を送られたらしいですね。

そして本題なのですが、その時に返礼としてワシントンDCから送られた木が、なんとハナミズキだったのです……

優子ちゃんの誕生の時に、お父さんがハナミズキを植えたという話が、とても印象に残っていたので伝えたくて……「私の想いを受けてください」ハナミズキの花言葉です。勝手な想像なのですが、お父さんの時代の男性が、花言葉を知っていたとは思えないですよ。しかし、とつても素敵なお話だなと思って……

そして、最後になりましたが、大輔君、優子ちゃん、

ご結婚おめでとう。お二人が末永く幸せであることを祈っています。それと、駆けつけてお祝い出来なくてごめんなさい。帰国したら、ぜひお伺いします。

江口先輩より

追伸 同封した写真はこちらに到着した朝に、空港から見えた景色です。なにか歓迎されているような気がしたので・・・』

その日の午後、母は父と一緒に旅行に出でしまっていたので、ポストを開けるのが私の仕事になっていた。中身はというと、朝刊とDMに混じって、江口先輩からのエアメールが届いていた。私はその場で封を切り、便箋に書かれている江口先輩の文字を、ひとつひとつ懐かしい気持ちで追いかけた。青いインクの万年筆で書かれたその文字は、相変わらず流れるようにキレイだけれど、以前よりずっと勢いがあるように見える。

同封されていた写真には、空港の一部らしい建物の向こうに、銀色に反射する湾とポストの街並み。その奥には薄い紫色に連なる山々と、白い雲。突き抜けるような透感のある青い空に、大きく美しく、アーチ状にかかった、あざやかな虹が映っていた。

(本当にこの一年、いろいろあったな・・・)

私が慌ただしかった、この一年の記憶の中に立ち止まっていると、

「こら、優子の荷物でしょ。さぼってんなよ」

必要以上に大きな声がある。見上げると、二階のベランダから身を乗り出している、Tシヤツにジーンズ、頭にタオルを巻いた大輔の姿が、庭のハナミズキ越しに見えた。

「ごめんごめん、すぐ行くから……」

季節は巡り、また初夏にさしかかっていた。

私は、思いつくと、玄関に積まれている、荷造りされたばかりの「大切な物たち」と書かれたダンボール箱のガムテープをはがし、いちばん上に重なっている『ザ・ルーツ』を取り出した。この本と出逢ったのも、こんな暑くなりはじめの頃だった……漆黒のカバーは、少し色褪せてしまったけれど、金色のタイトルは、相変わらずキラキラと輝いている。私は、ある法則のページを開くと、江口先輩から送られた手紙と、同封されていた、虹の写真をはさんで丁寧の本を閉じた……

「優子！」

もう一度、大輔の呼ぶ声が響いてくる。

「はあい！」

私は、『ザ・ルーツ』を抱きしめるようにして、階段を駆け上がった。

ルーツの法則

幸福な人とは、誰かの作った法則を学ぶ人ではありません。自分で法則を見出し、その法則を試すように、実験するように、挑戦するように、生きることのできる人です。

江見 佐智恵

兵庫県西宮市出身 1969年生まれ。大阪府吹田市在住。
甲南女子短期大学英語科卒業後、ダイキン工業株式会社入社。
約8年間のOL生活の後、美容健康関連事業に参入。その後、
結婚、離婚を経験し、自身の人生や仕事の経験からカウンセ
ラーとして独立する。現在、「バランスコミュニケーション
講座」を各地で開催。仕事、お金、人間関係に係る「因果関
係の法則」を研究して、理想の自分に近づくための生き方、
考え方を提案している。

■HPアドレス

<http://www.balacom.com>

■携帯サイト

<http://balacom.com>

■著者、本書に対するご感想、お問い合わせ先

info@balacom.com

■表紙・挿絵イラスト

平良 陽子

HPアドレス <http://ameblo.jp/daizodazo/>

お問い合わせ先 yokoyokoyochan@yahoo.co.jp

はなみずきの根っこ

2009年6月 初版発行

著者 江見 佐智恵

Copyright 2009 All Rights reserved by Sachie Emi

「ご協力お願いします・・・」

世の中には数多くの成功本や啓発本が出回っています。

しかし、それらを実際に実践出来るのは、既にある程度、幸福に生きている方であり、本当に必要な時に使えるものではないように思います。

そんな時にこそ《使える》法則本が作れないかと思ったのが、「はなみずきの根っこ」の制作のきっかけでした。

《幸福に生きている》多くの方は自分の人生の苦労や経験の中で、無意識のうちに法則を見つけて、生きておられるように思います。

また、成功されている方は、他者の書いた法則を学んだ訳ではなく、自分で法則を見出してきた方であるとも思います。

あなたが、今に至るまでの経験の中で見出した法則こそが、実際により多くの人に役立つ「本来の法則」だと思うのです。

あなたの人生の中で無意識に気付いていた、見出した法則を（意識化して頂き）集めたものを、「ルーツの法則」として世の中に発信（出版）したいと考えています。

是非、人生の中で発見された「わたしの法則」を教えてください。世の中に少しでもお役に立ちたいという思いで「ルーツの法則」を制作したいと思っております。

この私共のほんの小さな草の根的な活動ですが、人を大切にできるより良い社会を作る為に、また未来の子供達の為にも、この活動を続けていけたらと思います。

- わたしの法則
- その解説（具体的な経験など）

を info@balacom.com まで直接投稿下さい。

若しくは「バランスコミュニケーション」ホームページ

<http://www.balacom.com> の「ルーツの法則」投稿コーナーに書き込みをお待ちしています。

あなたより頂きました「法則」は、「ザ・ルーツ研究会」にて多くの人々に普遍的に役立つものを選び出して採用を決めさせて頂きたいと思えます。

投稿して頂く法則は、下記の方法で分類したいと思います。

①根源的で普遍的な法則で、独自のもの。

一般的で絶対的な法則（《例》感謝する。許す。与える。手放せば入ってくる。等々）ではなく、出来るだけそれらを実践できるような法則。

（例、あなたが誰かにした事は、誰かから返ってきます。誰かにされた事を誰かにしたくなります。）

②ジャンル別、条件付きのもの（仕事、お金、恋愛・結婚、健康、家族、その他）

ある内容に特化していたり、前提がある上での法則。

（《例》仕事は忙しい人に頼んだ方がよい。 時間にルーズな人はお金にルーズである。一人暮らしをした方が結婚しやすくなる。等）

■採用基準

①を優先的に採用いたします。

②に関しては、仕事、お金、恋愛・結婚、健康、家族その他、ジャンルごとに採用させていただきます。

今回採用にならなかったものに関しては、今後出版予定のルーツ仕事編、お金編、恋愛・結婚編、健康編、家族編 等にて採用をさせて頂きたいと考えております。

（注意事項） 既に一般化されているものや、過去に書籍化されている内容はできるだけお避け下さい。

なお頂きました法則、及び編集集中の「ルーツの法則」は随時HPにアップして参りますので、ご覧下さいませ。

<http://www.balacom.com>

◇ザ・ルーツ研究会◇

私共は個人情報の保護の徹底に努めております。ご投稿頂く事につき、以下に明記する個人情報の収集と利用についてのみ使用させて頂きます。

収集する個人情報：法則についての記入事項

収集した個人情報の使用：情報の送付、及びメールによる配信

メルマガも配信しております。

よろしければご登録下さいませ♪

★ バラコミ配信

バランスコミュニケーションを理解して人生をHAPPYに過ごす為のノウハウや法則など、日々の気づきの中で、皆様にお役に立てるメルマガを週1回程度配信して参ります。 t+37334@1lejend.com に空メールを送ると配信されます。

★ これだけは知っておきたい因果の法則 VOL 1

「ルーツの法則」の中にも登場する法則も含め、幸せに生きる為に是非知っておきたい法則を毎日1つずつ解説付きで配信して参ります。全12回、12日間のメールセミナーです。 t+37338@1lejend.com に空メールを送ると配信されます。

ホームページ<http://www.balacom.com> もしくは携帯サイト<http://balacom.com> から登録できます。

(携帯より登録される場合は balacom.com をドメイン指定して下さい。)

「はなみずきの根っこ」のご感想も是非おまちしております♪
info@balacom.com まで宜しくお願いいたします。

江見佐智恵